

プリオン病のサーベイランス結果
2021（令和3）年 2月開催 プリオン病サーベイランス委員会

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業
プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究班

【方 法】

以前の特定疾患治療研究事業、現在の難病法に基づくプリオン病を含む難病の医療費公費負担制度の申請の際に臨床調査個人票を添付することになっているが、1999（平成11）年度より、本人の同意（不可能な場合には家族の同意）が得られたプリオン病罹患の受給者の臨床調査個人票は厚生労働科学研究費補助金「遅発性ウイルス感染に関する調査研究」班（以下、「研究班」という。2010（平成22）年度より「プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究班」へ移行）に送付され、プリオン病の研究に活用されることとなった。研究班ではクロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランス委員会を設置し、その中で全国を10ブロックに分けて脳神経内科、精神科などの専門医をサーベイランス委員として配置し、さらに各都道府県のプリオン病担当専門医（難病担当専門医）の協力を得て、難病の患者に対する医療等に関する法律（難病法）に基づく特定医療費助成制度申請（以前は特定疾患治療研究事業）の際に添付される臨床調査個人票で情報が得られた患者について、原則として実地調査を行っている。また、2006（平成18）年度からは「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（感染症法）に基づいて届け出られた全症例についても、同意のもとで調査対象とするようになった。また、調査を行ううちにサーベイランス委員やプリオン病担当専門医（難病担当専門医）が察知した症例についても同様に調査している。さらに、サーベイランスの一環として全国の臨床医からプリオン病が疑われる患者について、患者（あるいは家族）の同意のもとにプリオン蛋白遺伝子検索の依頼が東北大学に、脳脊髄液マーカー検索の依頼が長崎大学に寄せられるが、この情報も調査に活用している。なお、以上の調査はいずれも患者（あるいは家族）の同意が得られた場合にのみ実施している。

サーベイランス委員は定期的開催される研究班のサーベイランス委員会（以下、「委員会」という）で訪問調査等の結果を報告し、委員会ではこの報告をもとに個々の患者について、診断の確実性、原因〔孤発例・遺伝性・硬膜移植例など〕などの評価を行っている。さらに以上のような手続きを経て登録された患者について、死亡例を除いて定期的に受診医療機関に調査票を送付し、その後の状況を追跡している。

また、2017（平成29）年4月より Japanese Consortium of Prion Disease（JACOP）によるプリオン病の自然歴調査と連携して調査を進めている（<http://jacop.umin.jp/jacop.html>）。

本報告では、これまで登録されてきたデータに加え、2021（令和3）年2月4—5日の2

日間に渡って開催されたサーベイランス委員会で検討された結果を加えた現状を報告する。

【結 果】

1. 1999（平成 11）年 4 月 1 日から 2021（令和 3）年 2 月 5 日までの期間に、研究班事務局を通じて情報を取得した 5856 症例（重複例を含む；前回報告＋159 症例）がサーベイランス委員会で検討された。このうち合計 3975 例（前回報告＋115 症例）がプリオン病として認められ、データベースに登録されている。

2. **表 1** に登録患者の性・発病年の分布を示す。発病年は、登録例全員では 2014（平成 26）年が 296 例で最も多く、次いで、2013（平成 25）年（293 例）、2015（平成 27）年（264 例）、2012（平成 14）年（261 例）となっている。表 1 に示すように近年（2017 [平成 29] 年以降）はいまだに人口動態統計によるクロイツフェルト・ヤコブ病の死亡数との乖離があるため、今後登録患者数が増える可能性がある。

表 2 に年齢別年次別患者数と罹患率を示す。60 歳以上ではいずれの年齢階級においても 2000 年代前半と比較して後半の患者数、罹患率の上昇が見られた。

表 3 に人口あたりの患者数を性・年齢別に示す。男女とも 70 歳代で人口あたりの患者数が最も多かった。すべての年齢階級で女の人口あたりの患者数が男に比べて多い傾向が観察された。なおこの数値は報告患者数を人口（2015 [平成 27] 年国勢調査人口）で除したものであり、年間の罹患率とは異なる。

3. **表 4** に発病時の年齢分布を病態別に示す。登録症例 3975 例のうち孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病（以下、「sCJD」という）が 3030 例（76%）であり、このうちプリオン蛋白遺伝子の検索が実施されたのは 1992 例（66%）であった。獲得性クロイツフェルト・ヤコブ病は 1 例の変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）を除いてすべて硬膜移植歴を有し（以下、「dCJD」という）92 例（2%）であった。遺伝性プリオン病のうち遺伝性クロイツフェルト・ヤコブ病（以下、「gCJD」という）は 676 例（17%）であった。このうち 663 例はプリオン蛋白遺伝子の変異が確認されている（残りの 13 例はクロイツフェルト・ヤコブ病の家族歴を有する症例で、1 例はプリオン蛋白遺伝子の変異を認めず、12 例は遺伝子未検索である）。ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病（以下、「GSS」という）が 156 例（4%）、致死性家族性不眠症（以下、「FFI」という）が 4 例であった。また CJD は確定しているもののプリオン蛋白遺伝子検索中や硬膜移植歴の確認中などで分類未定の者が合計 16 例存在する。全患者で見ると 70 歳代の患者の割合が最も多く（37%）、発病時の平均年齢は 69.5 歳（年齢の中央値は 71 歳）であった。発病時年齢の平均は dCJD 及び GSS が 50 歳代と低い傾向が見られた。

プリオン病の病態別に主要症状・所見の出現頻度を**表 5** に示す（頻度の高い sCJD、遺伝性 CJD、GSS のみを表示）。調査票の様式が 2017 年度から更新されたため、本表は新しい調査票で集計された患者のみを集計している。

表 6 に脳波と脳の MR I 所見の出現頻度を示す（**表 6** も新様式のみを集計である）。

4. プリオン蛋白遺伝子検索は 2871 例で実施されており、このうち 831 例が遺伝性プリオン病として登録されている。遺伝子変異の詳細を**表 7** に示す。既に死亡した本人のプリオ

ン蛋白遺伝子の検索は行われていないが、家族で異常が認められているために遺伝性プリオン病と判定された症例もあり、この表の結果は表 4 とは必ずしも一致しない。一方で、sCJD とされている症例の中にはプリオン蛋白遺伝子検索が行われていない者もいる。遺伝子変異に関する情報が得られた場合、患者及びその家族に対して不利益をもたらすことを理由に告知を行わないことは、医療行為等を介する伝播につながりかねないと研究班では考えており、むしろ、積極的にその遺伝子変異の持つ意味について説明を行うこととしている。告知については、基本的には主治医が行うことを原則としているが、必要に応じてサーベイランス委員会も協力している。また研究班には遺伝に関して造詣の深いカウンセリングの専門家も参加しており、要請があればサポートを行う体制を整えている。

codon 129 と codon 219 の分布を全登録患者、孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病（再掲）と全測定者別に表 8 に示す。

5. 追跡調査を含めて既に 3954 人の死亡が確認されている（2021 [令和 3] 年 2 月 22 日現在）。発病から死亡までの期間の分布を表 9 に示す。sCJD は全期間の平均が 17.9 ヶ月だが、dCJD と gCJD ではそれよりもやや長い傾向が観察された。GSS は長期にわたる経過を示す者の割合が高かった。

6. 診断分類と表 10 に示す。剖検率は全体では 13%（3975 例のうち 535 例）であったが、dCJD や gCJD では剖検率がやや高い傾向が観察された。剖検の結果をもとに 467 例がプリオン病確実例として登録されているが、剖検の結果が判明していない者が 68 例確認された。これらの症例については情報収集が続けられており、今後診断の確実度が上がることが期待される。また、サーベイランス委員会では診断確定のためには剖検は重要と考えており、剖検実施に対するサポートも実施している。

7. これまでに本サーベイランスで登録された硬膜移植歴を有する CJD 症例（dCJD）は表 4 に示すとおり合計 92 例である。今回のサーベイランス委員会で新たに 1 例が登録された。1987（昭和 62）年、くも膜下出血・左脈絡叢動脈瘤に対してクリッピング・開頭減圧術を受け、2020（令和 2）年に発症した症例である。開頭手術において Lyodura[®] が使用されていた可能性が非常に高く、剖検診断には至っていないが Probable 例として登録された。この症例の他に、既にサーベイランスで登録されていてその後の追跡調査により硬膜移植歴が判明した者、過去に全国調査や類縁疾患調査で報告され、その後硬膜移植歴が判明した者を含め、硬膜移植歴を有する CJD 症例（dCJD）は現在、合計 155 例が登録されている。

表 11 に硬膜移植を受ける原因となった病態の分布を示す。脳腫瘍が 69 例（45%）と半数近くを占め、脳出血（26 例；17%）がそれに次いだ。

表 12 に硬膜移植から dCJD 発病までの期間の分布を示す。多くの患者が 1987（昭和 62）年の硬膜処理方法変更以前に移植を受けた者なので、移植から dCJD 発病までの期間は長期化する傾向にある。今回新たに登録された症例では、移植から 33 年後に発病した。現在の平均は 13.3 年（標準偏差：6.9 年、最大—最小：1—33 年）である。dCJD 症例の発病年の分布を図 1 に、移植から発病までの期間（年）の分布を図 2 に示す（今回新たに登録された症例を斜線で示す）。

硬膜の処理法変更後に移植を受けた患者については、旧処理法の硬膜が使用されたことが判明している 1993（平成 5）年の移植例（1 例）を除き、処理法変更以前の硬膜使用なの

か変更後の硬膜使用なのかは判明していない。この他に硬膜移植の可能性がある症例が 13 例あり、現在も情報収集中である。

本研究班では、硬膜移植歴が明らかになった場合、その内容について主治医から家族に説明するように依頼している。2021（令和 3）年 2 月現在、すべての症例で主治医（あるいは医療機関）から患者（あるいは家族）へ「硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病である」ことが説明されていることが確認されている。

8. これまでの結果は、本結果も含めて、全てインターネットで公開している (<http://www.jichi.ac.jp/dph/inprogress/prion/>)。

以上

表1. 患者の性・発病年の分布

発病年	罹患数			死亡数(参考、人口動態統計) ¹⁾		
	男	女	計	男	女	計
-1995	7 (0)	16 (1)	23 (1)			
1996	3 (0)	5 (0)	8 (0)			
1997	7 (0)	24 (1)	31 (1)			
1998	24 (1)	34 (2)	58 (1)			
1999	32 (2)	54 (2)	86 (2)	51	64	115
2000	48 (3)	56 (2)	104 (3)	44	69	113
2001	54 (3)	62 (3)	116 (3)	62	61	123
2002	47 (3)	50 (2)	97 (2)	54	80	134
2003	48 (3)	69 (3)	117 (3)	70	72	142
2004	58 (3)	71 (3)	129 (3)	68	97	165
2005	73 (4)	86 (4)	159 (4)	72	83	155
2006	58 (3)	109 (5)	167 (4)	70	103	173
2007	77 (5)	89 (4)	166 (4)	70	97	167
2008	73 (4)	100 (4)	173 (4)	96	107	203
2009	94 (6)	120 (5)	214 (5)	79	87	166
2010	99 (6)	137 (6)	236 (6)	93	125	218
2011	111 (6)	145 (6)	256 (6)	107	112	219
2012	113 (7)	148 (7)	261 (7)	99	142	241
2013	131 (8)	162 (7)	293 (7)	116	136	252
2014	127 (7)	169 (7)	296 (7)	115	130	245
2015	118 (7)	146 (6)	264 (7)	120	143	263
2016	90 (5)	112 (5)	202 (5)	115	144	259
2017	81 (5)	84 (4)	165 (4)	127	165	292
2018	61 (4)	117 (5)	178 (4)			
2019	62 (4)	75 (3)	137 (3)			
2020	10 (1)	22 (1)	32 (1)			
不詳	2	4	7			
計	1708 (100 , 43)	2266 (100 , 57)	3975 (100 , 100)	1628	2017	3645

1) ICD 10th: A81.0+A81.8

注) 括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

表2. 患者の年齢別発病年の分布

発病年	年齢(歳)									
	-39		40-49		50-59			60-69		
	患者数	患者数	人口 ¹⁾ (千人)	罹患率 ²⁾	患者数	人口 (千人)	罹患率	患者数	人口 (千人)	罹患率
1999	2	4	17,158	0.2	19	18,646	1.0	34	14,525	2.3
2000	4	7	16,552	0.4	23	19,089	1.2	26	14,803	1.8
2001	4	2	16,080	0.1	21	19,221	1.1	41	15,128	2.7
2002	3	2	15,739	0.1	25	19,159	1.3	28	15,406	1.8
2003	5	6	15,566	0.4	19	19,052	1.0	38	15,636	2.4
2004	3	5	15,533	0.3	15	18,806	0.8	40	15,921	2.5
2005	4	6	15,619	0.4	26	18,968	1.4	49	15,950	3.1
2006	2	1	15,419	0.1	25	19,085	1.3	65	15,677	4.1
2007	2	5	15,685	0.3	20	18,324	1.1	37	16,216	2.3
2008	3	7	15,908	0.4	14	17,495	0.8	51	16,901	3.0
2009	3	7	16,127	0.4	29	16,712	1.7	60	17,698	3.4
2010	4	6	16,617	0.4	28	16,264	1.7	69	18,285	3.8
2011	0	5	16,992	0.3	34	15,793	2.2	66	18,392	3.6
2012	0	7	17,400	0.4	27	15,469	1.7	74	18,349	4.0
2013	0	5	17,794	0.3	22	15,295	1.4	82	18,262	4.5
2014	2	8	17,943	0.4	33	15,268	2.2	81	18,027	4.5
2015	2	5	18,306	0.3	21	15,429	1.4	73	18,200	4.0
2016	3	8	18,678	0.4	8	15,244	0.5	41	18,318	2.2
2017	0	4	18,579	0.2	20	15,533	1.3	42	17,605	2.4
2018	0	3	18,432	0.2	18	15,783	1.1	57	16,836	3.4
2019	0	1	18,181	0.1	10	16,036	0.6	40	16,104	2.5
2020	0	0			3			9		
計 ³⁾	46	104	354,308	0.3	460	360,671	1.3	1103	352,239	3.1

発病年	年齢(歳)									全年齢		
	70-79			80-89			90-			患者数	人口	罹患率
	患者数	人口 (千人)	罹患率	患者数	人口 (千人)	罹患率	患者数	人口 (千人)	罹患率	患者数	人口 (千人)	罹患率
1999	22	9,629	2.3	5	3,922	1.3	0	637		86	125,432	0.7
2000	31	10,030	3.1	13	4,140	3.1	0	700		104	125,613	0.8
2001	41	10,454	3.9	7	4,313	1.6	0	772		116	125,908	0.9
2002	32	10,847	3.0	7	4,499	1.6	0	854		97	126,008	0.8
2003	42	11,219	3.7	5	4,703	1.1	2	929	2.2	117	126,139	0.9
2004	48	11,526	4.2	18	4,935	3.6	0	1,013		129	126,176	1.0
2005	63	11,896	5.3	10	5,258	1.9	1	1,078	0.9	159	126,205	1.3
2006	55	12,179	4.5	17	5,577	3.0	1	1,152	0.9	166	126,154	1.3
2007	70	12,438	5.6	32	5,894	5.4	0	1,219		166	126,085	1.3
2008	69	12,612	5.5	27	6,209	4.3	2	1,277	1.6	173	125,947	1.4
2009	81	12,670	6.4	31	6,544	4.7	3	1,326	2.3	214	125,820	1.7
2010	85	12,960	6.6	39	6,809	5.7	3	1,368	2.2	234	126,382	1.9
2011	101	13,273	7.6	46	7,098	6.5	3	1,442	2.1	255	126,180	2.0
2012	101	13,595	7.4	47	7,391	6.4	5	1,524	3.3	261	125,957	2.1
2013	125	13,840	9.0	57	7,666	7.4	2	1,610	1.2	293	125,704	2.3
2014	113	14,137	8.0	58	7,909	7.3	1	1,713	0.6	296	125,431	2.4
2015	105	14,081	7.5	54	8,161	6.6	4	1,782	2.2	264	125,319	2.1
2016	83	13,873	6.0	53	8,432	6.3	6	1,922	3.1	202	125,020	1.6
2017	51	14,423	3.5	47	8,665	5.4	1	2,050	0.5	165	124,648	1.3
2018	63	15,099	4.2	35	8,836	4.0	2	2,179	0.9	178	124,218	1.4
2019	50	15,856	3.2	31	8,913	3.5	5	2,305	2.2	137	123,731	1.1
2020	11			9			0			32		
計 ³⁾	1442	266,637	5.4	648	135,874	4.7	41	28,852	1.4	3844	2,638,077	1.4

1) 人口動態統計で分母として使用している人口

2) 人口100万人対年間

3) 人口および罹患率は1999～2019年で算出(2019年以降は未報告が多いため低値となっている)

1998年以前に発症した症例は集計されていないため合計は表1とは異なる(少ない)

発症年が明らかな例のみを集計した。

発症時年齢不明の者が6名は分析から除外した。発病年齢が不明の者(4例)も分析から除外した。

表3. 性・年齢別人口あたりの患者数

年齢(歳)	男			女			人口10万人対患者数の性比(男/女)(a/b)
	患者数(人)	人口(千人)	人口10万人対患者数(人)(a)	患者数(人)	人口(千人)	人口10万人対患者数(人)(b)	
-39	21	25,410	0.08	25	24,470	0.10	0.81
40-49	48	9,269	0.52	56	9,126	0.61	0.84
50-59	201	7,698	2.61	259	7,748	3.34	0.78
60-69	518	8,811	5.88	585	9,288	6.30	0.93
70-79	623	6,370	9.78	819	7,603	10.77	0.91
80-89	244	3,051	8.00	404	5,028	8.04	1.00
90-	9	405	2.22	32	1,365	2.34	0.95

注)人口は2015年の国勢調査結果
発症時の年齢不詳が10人を分析から除外

表4. 患者の性・発病時年齢分布[病態別]

	全患者	孤発性CJD ¹⁾	変異型CJD	硬膜移植歴のあるCJD	遺伝性プリオン病			分類未定のCJD ³⁾
					遺伝性CJD ²⁾	GSS	FFI	
性								
男	1,708 (43)	1,309 (43)	1	39 (42)	272 (40)	77 (49)	3	7
女	2,267 (57)	1,721 (57)		53 (58)	404 (60)	79 (51)	1	9
年齢(歳)								
10-19	4	0		2 (2)	2 (0)	0		0
20-29	11 (0)	1 (0)		5 (5)	2 (0)	3 (2)		0
30-39	40 (1)	15 (0)		9 (10)	3 (0)	13 (8)		0
40-49	121 (3)	67 (2)	1	7 (8)	18 (3)	25 (16)	1	2
50-59	492 (12)	352 (12)		21 (23)	52 (8)	64 (41)	2	1
60-69	1,144 (29)	926 (31)		26 (28)	144 (21)	43 (28)	1	4
70-79	1,463 (37)	1,188 (39)		20 (22)	241 (36)	7 (4)		7
80-89	648 (16)	454 (15)		2 (2)	190 (28)	0		2
90-99	41 (1)	18 (1)		0	23 (3)	0		0
100-	0	0		0	0	0		0
不明	11	9		0	1	1		0
計	3975 (100)	3030 (100)	1	92 (100)	676 (100)	156 (100)	4	16
	3975 (100)	3030 (76)	1	92 (2)	676 (17)	156 (4)	4	16
平均(歳)	69.5	69.8		57.7	73.1	54.3		66.8
中央値(歳)	71	71		62	75	56		70
標準偏差(歳)	11.0	9.7		16.2	11.6	10.4		11.5
最年少(歳)	15	22		15	15	22		40
最年長(歳)	96	95		81	96	75		81

注1) 孤発性CJD 3030例のうち、プリオン蛋白遺伝子の検索が実施されたのは1992例(66%)であり、残りの症例では未施行。
 2) プリオン蛋白遺伝子の変異を認めないが、CJDの家族歴がある例を含む。挿入変異例はこのカテゴリに含まれる。
 3) 硬膜移植歴を調査中、患者死亡(剖検なし)により追加情報なし、プリオン蛋白遺伝子検索中、家族歴を調査中などがある。括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

表5. 主要症候等の出現頻度

	全患者	孤発性 CJD ¹⁾	遺伝性 CJD ²⁾	GSS
経過				
進行性(急速進行型)	530 (75)	429 (83)	97 (58)	4 (16)
進行性(緩徐進行型)	166 (23)	83 (16)	64 (39)	19 (76)
進行性ではない	12 (2)	5 (1)	5 (3)	2 (8)
WHO基準による症状				
ミオクローヌス	468 (66)	397 (77)	64 (39)	7 (28)
進行性認知症	699 (99)	519 (100)	165 (99)	15 (60)
小脳症状	326 (46)	254 (49)	52 (31)	20 (80)
錐体路徴候	359 (51)	277 (54)	72 (43)	10 (40)
錐体外路徴候	278 (39)	221 (43)	52 (31)	5 (20)
意識障害	323 (46)	271 (52)	46 (28)	6 (24)
感覚障害	66 (9)	48 (9)	8 (5)	10 (40)
視覚障害	253 (36)	221 (43)	30 (18)	2 (8)
精神症状	354 (50)	283 (55)	62 (37)	9 (36)
無動性無言	444 (63)	369 (71)	64 (39)	11 (44)
その他の症状				
起立・歩行障害	556 (79)	419 (81)	116 (70)	21 (84)
構音障害	260 (37)	202 (39)	40 (24)	18 (72)
嚥下障害	268 (38)	219 (42)	42 (25)	7 (28)
膀胱・直腸障害	137 (19)	104 (20)	27 (16)	6 (24)
てんかん発作	46 (6)	35 (7)	9 (5)	2 (8)
ADL				
発話能力障害	478 (68)	357 (69)	106 (64)	15 (60)
歩行障害	515 (73)	384 (74)	114 (69)	17 (68)
食事不能	324 (46)	284 (55)	36 (22)	4 (16)
人工呼吸器使用	1 (0)	1 (0)		
気管切開	2 (0)	2 (0)		
計	708 (100)	517 (100)	166 (100)	25 (100)

注1) プリオン蛋白遺伝子の検索を行っていない例を含む。

2) プリオン蛋白遺伝子の変異を認めないが、CJDの家族歴がある例を含む。

括弧内は%

表6. 検査所見の出現頻度

	全患者	孤発性 CJD ¹⁾	遺伝性 CJD ²⁾	GSS
脳波: PSD あり	2646 (69)	2416 (80)	214 (32)	16 (11)
脳波: 基礎律動の徐波化 あり	196 (72)	563 (19)	432 (65)	117 (82)
MRI: 大脳皮質の高信号 あり	435 (94)	323 (97)	107 (96)	5 (29)
MRI: 基底核の高信号 あり	202 (54)	164 (61)	36 (42)	2 (13)
MRI: 視症の高信号 あり	46 (13)	35 (14)	10 (12)	1 (7)

注1) 括弧内の分母は各検査の実施総数であり、検査結果不明の場合は除外した。
つまり、検査陽性と陰性との和が100%となる。

表7. プリオン蛋白遺伝子変異の分布

プリオン蛋白遺伝子変異	全遺伝性 プリオン病患者	遺伝性 CJD	GSS	FFI
102(Pro/Leu)	135 (16)		132 (86)	
105(Pro/Leu)	17 (2)		17 (11)	
178(Asp/Asn)	5 (1)	1 (0)		4 (100)
180(Val/Ile)	432 (52)	432 (64)		
180(Val/Ile)+232(Met/Arg)	4 (0)	4 (1)		
180(Val/Ile)+237(Ser/Phe)	1 (0)	1 (0)		
196(Glu/Lys)	1 (0)	1 (0)		
200(Glu/Lys)	97 (12)	97 (14)		
200 Glu/Lys 24bp Deletion	2 (0)	2 (0)		
203(Val/Ile)	3 (0)	3 (0)		
208(Arg/His)	1 (0)	1 (0)		
210(Val/Ile)	1 (0)	1 (0)		
232(Arg/Arg)	3 (0)	3 (0)		
232(Met/Arg)	102 (12)	102 (15)		
96 bp Insertion	3 (0)	3 (0)		
120 bp Insertion	5 (1)	5 (1)		
168 bp Insertion	2 (0)	2 (0)		
Three-time Octapeptide Insertion	1 (0)	1 (0)		
Extra-repeat Insertional Mutation	1 (0)	1 (0)		
178 2bp Deletion	1 (0)	1 (0)		
不明	17	13	4	0
合計	831 (100)	674 (100)	153 (100)	4 (100)

注1) 括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

2) プリオン蛋白遺伝子の変異を認めないが、CJDの家族歴がある例が不明に含まれる。

表8. プリオン蛋白遺伝子codon 129、codon 219の分布

	codon 129	codon 219			合計
		Glu/Glu	Glu/Lys	Lys/Lys	
全患者	Met/Met	2,524 (92)	25 (100)	5 (100)	2554 (92)
	Met/Val	221 (8)			221 (8)
	Val/Val	11 (0)			11 (0)
	合計	2756 (100)	25 (100)	5 (100)	2786 (100)
	合計	2756 (99)	25 (1)	5 (0)	2786 (100)
孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(再掲)	Met/Met	1,836 (95)	9 (100)	2 (0)	1847 (95)
	Met/Val	84 (4)			84 (4)
	Val/Val	11 (1)			11 (1)
	合計	1931 (100)	9 (100)	2	1942 (100)
	合計	1931 (99)	9 (0)	2	1942 (100)
全測定者 ¹⁾	Met/Met	4,128 (92)	147 (97)	10 (100)	4285 (92)
	Met/Val	349 (8)	5 (3)		354 (8)
	Val/Val	14 (0)			14 (0)
	合計	4491 (100)	152 (100)	10 (100)	4653 (100)
	合計	4491 (97)	152 (3)	10 (0)	4653 (100)

1) サーベイランス委員会で検討された症例(5697例)のうち遺伝子検索を行った者すべて(委員会でプリオン病を否定されたものを含む)

注) 全測定患者のうち codon 129 の結果はあるが codon219 の結果が欠損している症例が45例ある。

表9. 死亡者の発病から死亡までの期間

発病から死亡までの期間(月)	全患者	孤発性 CJD ¹⁾	硬膜移植 歴のある CJD	遺伝性 CJD ²⁾	GSS
0-11	1,633 (41)	1,384 (46)	36 (39)	208 (31)	5 (3)
12-23	1,071 (27)	846 (28)	30 (33)	183 (27)	12 (8)
24-35	534 (14)	421 (14)	12 (13)	89 (13)	12 (8)
36-47	210 (5)	131 (4)	6 (7)	53 (8)	20 (13)
48-59	124 (3)	79 (3)	2 (2)	27 (4)	16 (10)
60-71	70 (2)	28 (1)	0	27 (4)	15 (10)
72-83	37 (1)	10 (0)	1 (1)	11 (2)	15 (10)
84-95	34 (1)	9 (0)	1 (1)	12 (2)	12 (8)
96-107	25 (1)	5 (0)	1 (1)	6 (1)	13 (8)
108-119	19 (0)	7 (0)	0	6 (1)	6 (4)
120-	54 (1)	16 (1)	2 (2)	16 (2)	20 (13)
不明	143 (4)	94 (3)	1	38 (6)	10 (6)
合計	3954 (100)	3030 (100)	92 (100)	676 (100)	156 (100)
平均(月)	22.2	17.9	23.1	29.2	76.0
標準偏差(月)	26.6	19.2	28.3	31.9	51.4
最小(月)	1	1	1	1	5
最大(月)	312	312	206	250	294

注1) プリオン蛋白遺伝子の検索を行っていない例を含む。

2) プリオン蛋白遺伝子の変異を認めないが、CJDの家族歴がある例を含む。

括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

表10. 診断分類

	確実例	ほぼ確実例	疑い例	合計
sCJD	325 (11)	2263 (75)	442 (15)	3030 (100)
dCJD	41 (45)	36 (39)	15 (16)	92 (100)
gCJD	84 (12)	581 (86)	11 (2)	676 (100)
GSS	14 (9)	139 (89)	3 (2)	156 (100)
FFI	3	1		4

未確定の症例は除外している

この他に、変異型プリオン病(1例)と分類未定のプリオン病(1例)の2例が確実例として報告されている
括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

sCJD: 孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病

dCJD: 硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病

gCJD: 遺伝性クロイツフェルト・ヤコブ病

GSS: ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病

FFI: 致死性家族性不眠症

sCJD, dCJD

確実例: 特徴的な病理所見, またはウェスタンブロット法や免疫染色法で脳に異常プリオン蛋白を検出.

ほぼ確実例: 病理所見がない症例で, 進行性痴呆を示し, 脳波でPSDを認める. 更に, ミオクローヌス, 錐体路/錐体外路障害, 小脳症状/視覚異常. 無動・無言状態のうち2項目以上示す. あるいは、「疑い例」に入る例で、髄液14-3-3蛋白陽性で全臨床経過が2年未満.

疑い例: ほぼ確実例と同じ臨床症状を示すが, PSDを欠く.

gCJD, GSS, FFI

確実例 : 特徴的な病理所見, またはウェスタンブロット法や免疫染色法で脳に異常プリオン蛋白を検出し, プリオン蛋白遺伝子変異を有する.

ほぼ確実例: 病理所見はないが, プリオン蛋白遺伝子変異を認め、臨床所見が矛盾しない.

疑い例 : 病理所見がなく, プリオン蛋白遺伝子変異も証明されていないが, 遺伝性プリオン病を示唆する臨床所見と家族歴がある.

表11. 硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病患者の移植のもととなった病態

病態(疾患)	人数 (%)
脳腫瘍	69 (45)
脳出血	26 (17)
未破裂動脈瘤	10 (6)
脳血腫	7 (5)
奇形	8 (5)
事故	7 (5)
顔面痙攣	19 (12)
三叉神経痛	7 (5)
その他 ¹⁾	2 (1)
計	155 (100)

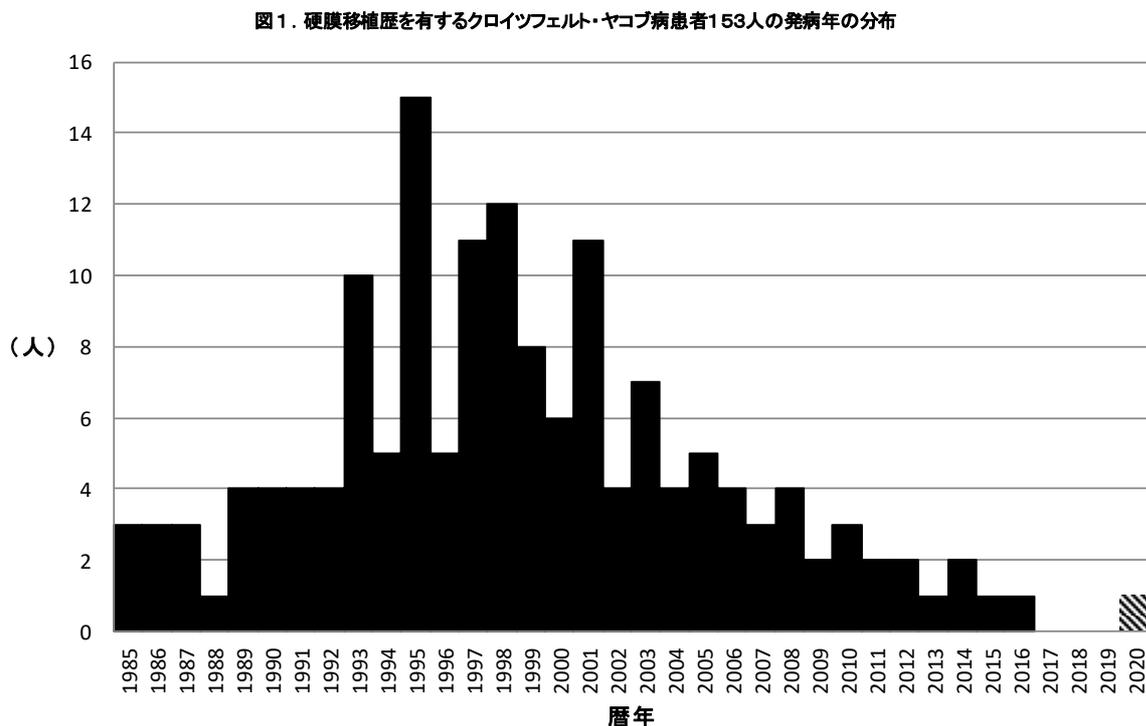
1) 後縦靭帯骨化症1例、外傷後てんかんのfocus除去手術1例

括弧内は%(四捨五入の関係で合計は100%にならないこともある)

表12. 硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病患者の移植年と移植から発病までの期間

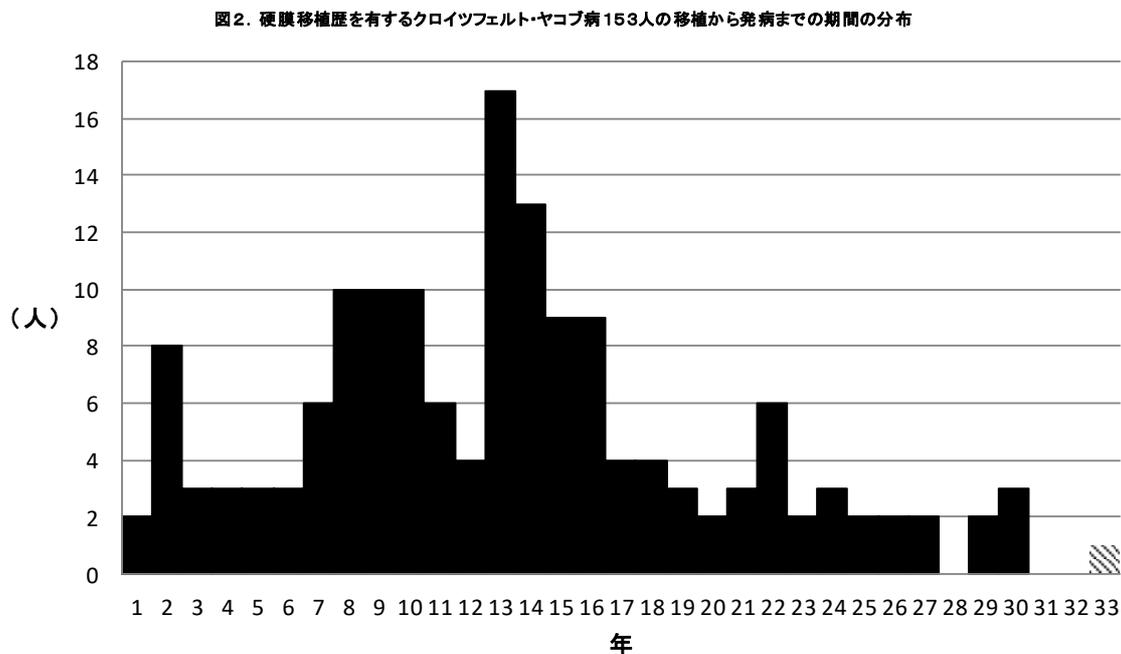
移植年	移植から発病までの期間(年)																																	合計		
	1-10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	不詳											
1975																																		1	1	
76																																				0
77																																				0
78													1	1																					2	
79						1					1																								2	
1980							1	1																										1	3	
81	1				1																														4	
82	4				2		1							1																					8	
83	6				1	5	1						1																			1		16		
84	12	2			4	1	1	1	2				1	1							2													28		
85	12	1	1		2	2		2	2		1	2									2												2	26		
86	10	1	2	3	2	4	4	2						3																				31		
87	8	2	1	3	1		2			2		1									1	1											1	23		
88	1						1					1																							4	
89	2																																		2	
1990													1																						1	
91	1																																		1	
92																																				0
93	1					1																													1	3
合計	58	6	4	17	13	9	9	4	4	4	3	2	3	6	2	3	2	3	2	3	1	155														

図1. 硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病患者155人の発病年の分布



斜線は2021年2月のサーベイランス委員会で新たにdCJDと認められた例である。

図2. 硬膜移植歴を有するクロイツフェルト・ヤコブ病患者155人の移植から発病までの期間の分布



斜線は2021年2月のサーベイランス委員会で新たにdCJDと認められた例である。